

月例研究会（2015年11月25日）

ハワイ大学マノア校での
一年間を振り返って
—2014年度在外研究報告

榎 一江

報告者は、2014年4月、米国ハワイ大学マノア校日本研究センターに客員研究員として赴任し、「日系移民労働史」をテーマとする一年間の在外研究を終え、2015年4月に帰学した。そこで、2014年度在外研究報告として①ハワイ大学マノア校での経験を振り返り、②エスニックスタディーズにおける日系移民の歴史に関する研究動向を紹介したうえで、③現在取り組んでいる研究課題について報告した。

①ハワイ大学マノア校での受け入れ先は日本研究センター（CJS）であり、受け入れ関係の諸手続きは副所長のDr. Gay Satsumaを通して行われた。ハワイ大学全体としては、日本研究にかかわる教職員が37人、日本語教育にかかわる教職員が14人おり、CJSは学内で日本研究を推進する場として位置付けられている。このCJS関連のセミナーやシンポジウムに参加し、アメリカにおける日本研究の動向について有意義な知見を得ることができた。

②エスニックスタディーズにおける日系移民の歴史については、Jonathan Y. Okamura教授のJapanese in Hawaiiという講義を聴講させていただいた。この講義は、19世紀末から現在に至るハワイ社会の変容の中で日系移民の動向を確認するうえで貴重な経験となった。そもそも、ハワイ王国がプランテーション労働者として契約労働者を大量に受け入れたのは中国からが最初であった。次いで、1885年に明治政府との条約による日本人労働者のハワイ移住がはじまり、官約移民と呼ばれたが、広島、山口、

福岡、熊本県出身者が多かった。以来、ハワイ共和国樹立により官約移民が廃止される1894年までに約29,000人の日本人が契約労働者として砂糖キビプランテーションで働くため、ハワイに渡り、その一部はハワイ社会に定着していった。この日系移民の歴史は、日本では移民研究として研究分野が確立され、米国ではアメリカンスタディーズやエスニックスタディーズといった分野で大いに議論されている。しかしながら、社会経済史的分析はあまり見られないため、日本経済史の観点からも、再検討の余地があるように思われた。

③現在取り組んでいる研究課題は、「ハワイにおけるコーヒー産業の形成について」である。ハワイ島コナ地方で生産されるコナコーヒーは、現在でも高級品として取引される商品の一つであるが、19世紀末からこの地でコーヒー栽培に従事したのは日系移民たちであった。その歴史については、若干の通史があるのみでまとまった研究はない。また、ハワイ大学オーラルヒストリーセンターはコーヒー生産者を含むコナ地域のオーラルヒストリーを収集し、契約労働者としてハワイに来た日本人がプランテーションから逃亡してこの地域に潜伏し、コーヒー栽培を開始したという語りを紹介しているものの、なぜ、日本人のみがコーヒー栽培に従事し、一定の成功を取めたのかは十分に解明されていない。グローバルヒストリーの観点からも注目されるコーヒー栽培者の歴史について、日本側の資料を渉猟しつつ、社会経済史的な分析をおこなった。そして、ハワイ王国が、共和国制への移行を経てアメリカ合衆国に併合される過程において、官約移民としてハワイにわたった日本人が、当時興隆しつつあったハワイ島のコーヒー産業に活路を見出し、契約労働者から独立生産者へと至る過程を跡付け、新たな研究の可能性を提示した。

（えのき・かずえ 法政大学大原社会問題研究所准教授）